

道路ユーザーネットワーク広場

NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK



2015年は大所帯。草が足りず、他所で刈ってせせと運ぶ日々。4頭から乳を絞っていました。



裏山の林道が遊び場のワンコ3頭。ママシにやられたこともあるけれど、いたって元気です。



高齢のミーちゃんは、乳母役で行った先で大往生。皆に愛されまくり「ミーちゃん塚」が建った。

私の人生に欠かせないものを3つあげるとしたら、バイク(旅)・動物・大自然でしょうか。先日「トレイルランニングの元気の元は？」と聞かれて間髪を入れず答えたのは、「動物たち(夫を含む?)」でした。「アフリカの夕日を見ること」という幼い頃の夢は、そこに多種多様な野生動物たちがいるから。「野生のエルザ」のJ・アダムソンのように動物に関わりたいと思い、目指したこともありましたが、16歳でバイクと出会ってベクトルが激変。ラリーを含む100万キロの旅で体験したさまざまな「人間の有り様」が、私の人生そのものになりました。動物と再び縁ができたのは、20年前。あれよあれよと言う間に、シェットランドポニー、山羊、



三好礼子
エッセイスト・国際ラリスト
~http://www.fairytale.jp/~

★三好礼子の★
ナチュラル・ロード

犬猫、鶏、時には合鴨数千羽という大所帯に。ここ松本市の山間の四賀地区に引越して丸3年経ちました。きつかけも「動物たちのよりよい環境を求めて」でした。彼らを支える草や環境は人間が変えてあげなければ、改善されません。結果はよしですが、それは「動物協奏曲第2楽章」の始まりでもありません。以前静岡で飼っていたメス山羊が頭がたまたま松本に里帰りのたてで、モッタイナイ精神でチーズ作りを再開。酪農家もとい楽農家と言っておりましたが、頭数が増えて大量生産となると、毎日がおおさわらわでした(1a苦悩の家。恵みがたくさんあったので、カフェも再開しましたが、草地の確保よりも大抵変ったのは、老齢との格闘でした。そもそも飼育主と同じく人生の後半に突入した動物たち。特に山羊は10歳を超え、人間で言う80〜90代。大雪の冬を越してやっとお産したら死産だったり、冬を越えられずに老衰したり、やっと生まれても乳房炎で赤ちゃんが死んでしまったり、想像もつかないことが次々と勃発。プロの夫も経験したことないような出来事に、改善と格闘の日々。ポニーも元々の持病が時々再発し、倒れては奇跡の復活を繰り返すこと数回。そこに散歩の途中で犬たちが野生の鹿を追いかけて大騒動と、話題沸騰で落ち着く暇もなし。しかし私は一昨年から更年期を脱出し、超元気な年間29ものトランヘル地球上をぐるぐる。帰ってくる待ち構えるかのように事件。でも、チーズは世界で一番美味しくて、動物たちはいつも笑顔。癒されるけれど、頭は痛い。とにかく大変だけれど、勉強になることは星の数ほどあります。老齢山羊たちは、昨日まで草を食んでいたのに、急に食べなくなっていて横になって、苦しうではあります。が、すくっと命を閉じていきます。深い「全う」ぶりを何頭か見ていううちに、「寝たきりになった母も最期はこうあって欲しい」と家族に伝えていました。が、ちょうど一年前に亡くなった母は、まさに山羊の最期と同じでした。葬儀から粉骨を経ての散骨まで自分たちの手で行えたのは、実はたくさん動物たちの死に向き合っていたから自然に出来たことだったのです。昨年若く山羊が残ったので、ちょっと一息。ポニーも下痢と草を噛めない未熟状態だったので、またもや復活し、今も元気に走り回っています(私と似ていますか)。犬たちが10〜15歳と高齢になり耳が聞こえなくなった子もいるので、それにしては動物たちにとつて今の地球は、過酷です。胃からプラスチックが検出される魚、異常気象で大地や餌がなくなる野生動物、原因不明で大量に浜に打ち上げられるイルカやクジラ。取引禁止にも関わらず根絶できない象牙の密猟。幼い時に心に痛みを遺す。勝手に飛んでくるミサイルは言語道断ですが、その下の生態系がとつても気になる。人々の魂でリセットできる日が必ず来て欲しい。まずは目の前の命たちと笑顔で向き合います。



平和の構図「今を生きる」彼らに学ぶことは無限大。さて今年はどんな光景になるのかな?



ブリンが戻ってきた!この後痛恨の切腹となるも、前向きな生命力には驚かされっぱなし。

で、そろそろ覚悟期間に入りましたが、つい先日、猫の失踪事件が起きました。12日後に帰ってきました。が、足先がぶらんぶらん。獣師さんが山に仕掛けたくくりわなではなく、一般家庭に設置されたトラパミ(現在は違法)に愛猫が挟まれたようです。敷地から出たことのない外猫でしたが、縄張り争いで少し遠くに出かけたのでしょうか。生きていてよかった!でも壊死部分は削除せねばならず、まさに今、動物病院で切腹手術中(涙)。生後間もない時に富士宮の田んぼで拾った猫ですが、他のすべての動物たちとコミュニケーションできる愛される子。きつと復活して、また私たちに力をくれることでしょう。頑張れ!

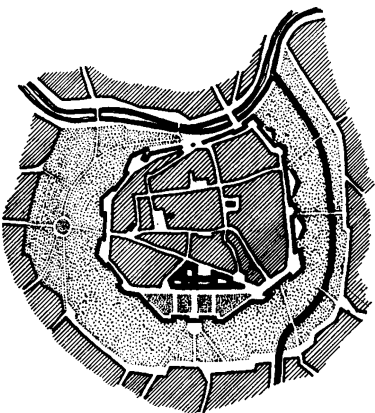
都市計画の中の街路⑦

ハロウの都市と街路(その3)

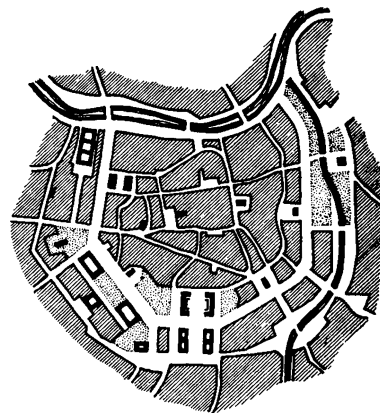
東洋大学国際地域学部・准教授 志摩憲寿

オスマンのバリ改造の頃、ヨーロッパの他の都市でも中世都市からの改造が図られましたが、大胆に街路を整備した例にウィーンがあげられます。現在「ウィーン歴史地区」として世界遺産にも登録されているこの地区の原型はこの時期に形づくられたのです。ウィーンでは、とりわけ16世紀以降、オスマントルコ帝国の西方進出、イスラーム教の脅威などの危機に対応し、ハプスブルグ帝国、さらに、ヨーロッパキリスト教文化圏を守る稜堡型都市として、市壁の外に幅500mの広大な環濠が巡らされていきました。18世紀に入りこうした危機を乗り越える必要はなくなる一方、都市の人口は25万から30万人へと増加し、城壁内の過密化から環濠の外側に商業地帯を移住させていきました。19世紀に入ると、本来は軍事目的で設計された市壁を囲む空地は、憩いの場として市民から日常的に親しまれており、中世都市としての都市ウィーンは転換点を迎えていました。ウィーンの改造が本格的に始まるのは1858年のこと、フランツ・ヨーゼフ一世が親書を公表し、城壁と環濠を撤去して環状道路を建設し、官庁建築、大学、劇場、博物館などの公共施設をその沿道に建設することになった。この頃、ハプスブルク家は相次ぐ敗戦や領土縮小にあうなど、苦しい状況にありましたが、優秀な官僚組織にも支えられ、ウィーンの改造は見事な完成を見たのでした。

図 城壁と環濠の後に整備されたウィーンのリンクシュトラッセ



(1)1857年以前のウィーン



(2)リンクシュトラッセ整備以降のウィーン

参考文献:日端康雄(2008)『S. et al. (1986) "The Urban Pattern (6th Edition)"』講談社現代新書、都市史図集編纂委員会(1999)『都市史図集』彰国社、Bisner, Id

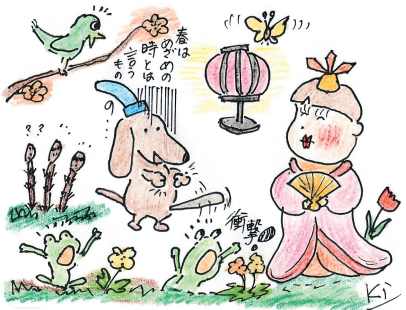


ハット
思いました

月初めは、雛祭り、あちこちから「灯をつけましょ ぼんぼりに。」と聞こえてきました。

灯は私たちの生活にとって、とても大切なものなのです。夕まずめには、クルマのライトを点灯して視認性をアップするのが現在の通説。二輪車に至っては、昼夜を問わず走行中はライトを点灯した状態です。

この灯や光は、エネルギーそのもの。生活に不可欠なエネルギーなのですが、どんな形のエネルギーを選ぶかは人々が決めるもの。



最近のクルマの動力源をみると、考え込んでしまいがちですが、クルマのライトを点灯して視認性をアップするのが現在の通説。二輪車に至っては、昼夜を問わず走行中はライトを点灯した状態です。これを認める、現状の環境を望んでいる自分もいるのです。なんて、身思います。さて、お彼岸は、春と秋だけでなく、夏と冬にもあることに、以前、一度触れたことがあります。そう、

は、四季を受け入れて、生かして頂いていると言っている。春分は牡丹の花の盛り、秋分は萩の花の盛り、夏至は夏の夜の海は暗い、冬至は冬の夜の海は明るい。四季の移り変わりが、私たちの生活に深く関わっている。お彼岸は、春と秋だけでなく、夏と冬にもあることに、以前、一度触れたことがあります。そう、